

令和元年6月13日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26381004

研究課題名（和文）近代日本の学力観の変遷に関する歴史的研究 - - 中等程度の検定試験に注目して - -

研究課題名（英文）Historical Research on transition of the concept of scholastic ability in modern Japan

研究代表者

三上 敦史（MIKAMI, Atsushi）

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：30362304

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：第一に、中等程度の検定試験の主たる受験者である勤労青少年の意識の変化に注目し、そうした者を対象に出版されていた最大の修養雑誌『成功』について資料収集・記事分析を行った。同時に、同書は国内の図書館に散在しており、学術的価値の高さにもかかわらず復刻が行われていなかったため、不二出版とともに復刻事業を行った。

第二に、中等程度の検定試験受験者が目指す主たる進路は高等教育への進学であることに鑑み、中京圏に注目して予備校の成立・展開の様子に関する資料収集・分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

修養雑誌『成功』に関する研究は、復刻事業の最終巻に解題として掲載した。同書の復刻は、日本史・教育史・文化史などさまざまな分野の研究者から待ち望まれていたものであり、今後、多くの研究者に便宜を図る結果となったことは疑いない。

予備校に関する研究は、教育史においてほぼ手つかずとなっている学校外の教育のありように関する歴史的研究であるとともに、入試改革について議論する際の重要な手がかりとなる領域である。多方面の研究者に資料として活用されることを期待したい。

研究成果の概要（英文）：First, we focused on changes in the awareness of working adolescents, who are the primary candidates for the intermediate level examinations, and conducted data collection and article analysis on "Success", the largest educational magazine published for them. At the same time, the book was scattered in the domestic libraries, and despite the high academic value, there was no reprint, so we reprinted with Fuji Publishing.

Secondly, in view of the fact that the main course that the secondary test examination applicants aim at is to advance to higher education, we focused on the Chukyo area and conducted data collection and analysis on the appearance and development of the preparatory school.

研究分野：教育学、日本史

キーワード：修養雑誌 予備校

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

従来、私は近代日本における非正規の中等教育の歴史的研究をテーマとして、取り組んできた。

すなわち、夜間中学(制度的には各種学校・青年学校・私塾など)、鉄道教習所・通信講習所(いずれも制度的には文部省以外の省庁が所管する学校)など、主に経済的事情によって正規の中学校・実業学校に進めなかった青少年の学びの場について研究してきた。これらは、正規の中学校・実業学校と同じ年齢層の青少年を入学させ、それらに準じた修業年限・カリキュラムで教育を行っていた教育機関だが、発足当初、正規の中学校などに付与される特典(例えば、在学者には徴集猶予、卒業生には上級学校進学資格)は付与されなかった(その後、昭和戦前期ないしは戦後間もなくの時期になって、文部大臣による学校認定によって特典を与えられる)。

これは日本における中等教育とは何かについて、正規の教育制度の教育課程を踏まえて構築されたものの、制度的には非正規とされてきた教育機関の実態に注目して説明かすそうとするテーマである。今回もその延長線上にあるテーマだが、近代日本において中等教育で身につけるべき学力はどのように規定されていたかについて、中等程度の検定試験を素材に解明することを構想した。

周知のように、近代日本において義務教育は初等教育だけであり、中等教育に進学するためには経済的な問題をクリアーしていることが前提だった。それがクリアーできなければ、陸海軍や通信省・鉄道省などが設置する官費の文部省所管外学校へ進むか、昼間は働きながら夜間に各種学校で学ぶとか、講義録などを取って自習するといった苦学・独学を選ぶほかなかった。こうした学びを選んだ者が、正規の中等・高等教育へ進んだ者と同等の資格をとるために用意されていたのが各種の検定試験である。

その検定試験には、以下のような特徴がある。

(1)中等程度の学力検定が「高等学校卒業程度認定試験」(高認、かつての大学入学資格検定試験=大検)一つにまとまっている現在と異なり、「専門学校入学者検定試験」(専検、中学校・高等女学校卒業程度)、「高等学校入学者検定試験」(高検、中学校4年修了程度)、「実業学校卒業程度検定試験」(実検)、「小学校本科正教員試験」(小本正、師範学校卒業程度)を代表格として、他にも数多く存在した。

(2)多くの検定試験には、ペーパーテストによって点数で合否を決定する「試験検定」のほか、文部大臣が指定した者についてペーパーテストを課さずに合格とする「無試験検定」があり、その指定の範囲も時期によって大きく異なっていた。

(3)検定試験の発足時期は1890年代~1910年代に分散し、試験内容、実施方法、試験相互の互換性、合格者に与えられる特典も時期によって大きく異なっていた(例えば、当初、専検は一度に全科目合格が必要、実検合格者は上級学校進学不可など)。

重要なのは(2)と(3)である。これらの検定試験は、ある段階の学校の教育課程を修了した者と同等以上の学力を有しているかどうかを公式に認定するのみならず、同時に上級学校への入学資格、職業上の特典、兵役上の特典など、社会的な諸制度と密接に結びついていた。このため、不公正な取り扱いに陥らぬよう、厳格な規程を制定し、それに依拠して実施されてきた。その内容や特典に歴史的な変化があるということは、中等教育の制度的な変化とともに学力観にも変化があったということである。

### 2. 研究の目的

本研究は、近代日本の中等教育機関(中学校・高等女学校・実業学校・師範学校)の修了程度で実施されていた検定試験の内容およびその制度的な変遷(特に合格者に対して付与される資格・特典の内容変化)に注目することで、中等教育で身につけるべき学力がどう定義づけられ、またそれがどう変化したかを歴史的に明らかにすることを、当初の目的として設定していた。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下の4つのカテゴリーの資料群を収集・分析することとした。

(1)国立公文書館が保存する各種検定試験(国家試験)の創設・実施に関する文書、また無試験検定に関して作成された申請・許認可文書。

(2)都道府県立公文書館が保存する各種検定試験(府県レベルで実施していた試験)に関する上述(1)と同様の文書。

(3)国立国会図書館・都道府県立図書館などが保存する、各種検定試験の受験に関する参考図書、それらの記事を掲載する雑誌(例えば、府県教育会が発行する教育雑誌、各種検定試験の受験生が購読した特定分野の受験雑誌、独学・苦学を志す勤労青少年が購読した修養雑誌)や新聞記事。

(4)高崎商科大学が所蔵する専検・文検に関する各種資料群。

これらの一連の作業を通じて、近代日本における中等程度の検定試験の制度設計の意図、実施科目・試験内容の変遷が明らかにすることを目指すこととした。それに加えて、「正規の中等学校に通学できなかった者のうち、どのような学歴・進路希望を持つ者がどの検定試験に臨んだのか」、「それぞれの検定試験の社会的評価の差異はどうであったか」、「通信講習所など非正

規の教育機関と検定試験との関係はどのようになっていたか」の3点を明らかにすることを意図していた。

#### 4. 研究成果

(1)まず当初の2年間で取り組んだのは、独学・苦学を志す勤労青少年を主たる読者として1902-16年に刊行されていた修養雑誌『成功』の記事についての分析であった。

同誌は、村上俊蔵(濁浪)が設立した成功雑誌社により、1902年10月10日付の第1巻第1号から1916年2月1日付の第31巻第2号までの、少なくとも足かけ15年間にわたって刊行された月刊誌である。明治末期から大正初期にかけて、当時の日本を代表する知識人、実業家、陸海軍将校等が、学問や職務に精励することによって「成功」を「自助的」にかちとることを説く修養雑誌であり、勤労青少年を主たる読者としながらも、学歴・職業・希望進路などを問わず広く青少年一般に読まれた雑誌であり、その歴史的価値は非常に高い。しかるにその全体をまとめて所蔵する図書館はなく、全国各地に散在している状況であった。折しも、不二出版で同書の復刻事業に着手することになっており、その資料収集ならびに解題の執筆を承引したところであったので、資料調査・研究を進めることは極めて時宜にかなっており、研究成果をダイレクトに世に送ることとなった。

具体的には、復刻事業に助言を行ったほか、その解題・総目次を出版することができた。これにより、近代日本の教育・社会・文化に関する歴史的研究に携わる者に少なからぬ便益が図られたと考えている。

(2)これに続く2年間は、各種の資料収集に取り組んだ。しかしながら、公私ともに多忙を極め、成果を順調に送り出すことは困難であった。このため、事業期間の延長を願い出て許可された。

また、作業の遅延に対応して、計画の再構築を行った。具体的には、「学力観」という語について再検討を行った結果、近代日本の中等教育機関(中学校・高等女学校・実業学校・師範学校)の修了程度で実施されていた検定試験の内容およびその制度的な変遷(特に合格者に対して付与される資格・特典の内容変化)の分析を進める時間はないので、とりあえずは、検定試験合格後にその成果を最も直接的に活かす場である高等教育機関の入学試験に注目し、そのサポートのための機関である予備校が誕生する経過について、地方都市である中京圏を選んでケーススタディを実施することとした。この結果、予備校誕生の契機となるのは当該地域への高等教育機関(なかんずく高等学校や人文・社会科学系の専門学校)の設置であること、当該地域において最初に誕生した予備校の経営戦略が後発の予備校のそれに多大な影響を与えること、校長あるいは看板講師に突出した名声がないと持続しないことを見出した。この成果を論文化し、北海道教育大学紀要に掲載した。

その他、上述した検定試験の中で最も一般的な専門学校入学者検定試験に関していくつかの有益な資料を収集して整理分析を終えたものの、時間切れのため論文化するには至らなかった。例えば、専検の実施にあたって生じた事故の処理に関する資料を発見し、それに関する当事者の体験談を受験雑誌から発見することができたが、これは現代においても参考にするべき有益な示唆が得られるものである。今後は事業期間の終了後になるものの、得られた成果を基にした学会発表・論文化を精力的に行っていく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

三上敦史、「近代における中京圏の予備校の誕生」、『北海道教育大学紀要 教育科学編』、査読なし、第69巻第2号、2019年、pp1-16。

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

三上敦史、不二出版、2015年、『復刻版 成功 別冊 解題・総目次』(ISBN978-4-8350-7737-6)、総ページ数346ページ(うち解題は37ページ、総目次は309ページ)。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。